

俳諧一葉集

二

14

3157

30(2)



14
3157
30
(2)



俳諧一葉集附合之部一

古学庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

延寶五丁巳春

桃青

此梅下生も初言と噂つ下
まーとや嘘人下の 俳 信章
まの粉と志やまゝるまの中に
破 味唱まー下の神楽の下 崩 青
摺跡も若松おすくゝるも
むーくゝくゝの男あつた

章

たはけりよてしよりのふに秋の青
あけ山あのかへ一は風を
しやふとてぬ。袋の角の青
し里をうけつるすをわねも
あのみ月えぬ古の。札の辻
あへまは町し引きまき
あねの本屋中。寝まはあ
人はあね山。姥もあ
谷の戸をけむ起しと解し
法多の小夜うららの青
花もあへてすぬ子のありの青
上野下屋の味はまを

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

陽同費新好和おす朽果
程も毛き使出る方を
あへてはわをわあむさ
もくもやね録鬼子人数の月
大守中畫巻を親子取え
ふはの授ハのれ終ハ
あも木子三百うに映つる
あ山ありの陰石料
三 不二の嶽のくを別
人穴あふふと和桶の座
あ場やま角の紙のあやふ
山極つふや故極ふむ

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

小松やとらしくがハ引くまゝハ
 甚不 とう 女のうの意
 可うの強ハニ能ハ切 暮りれと
 が こそ 柳屋 夕紗 子 松
 と 子 子 子 子 子 子 子 子
 能 因 法 沙 若 前 の 子 子
 思 っ け 々 々 々 々 々 々 々 々
 飢 饉 々 々 々 々 々 々 々 々
 多 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 一 葉 っ 柳 の 葉 や 々 々 々 々
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

お 友 の 身 々 々 々 々 々 々 々
 対 面 陣 々 々 々 々 々 々 々
 柳 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 柳 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 君 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 夢 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 月 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 河 内 の 夢 々 々 々 々 々 々 々
 四 葉 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 浪 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 叶 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 や 々 々 々 一 流 柳 々 々 々 々

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

名
 いしきくハ魔はしきと久入尺上
 七リシクく入あめり
 集福三井の古寺汲りけり
 落さきし様しきのこら疵
 階はぬら目くハ八目より
 湯まはれきり玉合のり
 既手神みしきわうさめひり
 白髪殿ハ沙手より様
 つくしと向手たしり後山
 つけ入新屋ハ小姓の駒を
 思ふ花ハ萩のあまきまりりむ
 西子く子揚り萩のあまのきり

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

唐人も夕の月よりくわく
 古文書言書のつぎり 秋
 暈のあはれけきで白雪飛
 了物たかーや人のくささや
 新のよき記杖の大木大間屋
 泣きとけりえさきあゆりま
 秤より日本のおもやうけぬん
 所く杖のあまをくつめぬん
 花手よりく禁の里ハ十圍子
 白坂くゆきハ峰のさきりい

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

同年春

梅の風 何故あらずさうんあう
 こらとくつ けりては 叶のま
 まわす人す 雲のまの袖ええ了
 けんやうー ぬ心のまけふ
 きしこに 中ける方物ー ます
 うの地々 ちとけとけさひき
 海えー ちまの葉子月すー
 趣向 ー 船のぬま方
 いのい 過着こらえさる秋の風
 雲ー 土用し 何月の羽衣
 うつ 蝶々 ー ちの山 ー ちの山
 音 嵐 ちくひとよぎう ちく

信章

桃青

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

松敷の本町の夜 ちとあれ
 雀 擔 桶 ちとー 村のち
 夕陽 ちと ちと ちと ちと
 夫子のすしー 山の端から
 宮堂のむー ちの葉子
 桐 ちと ちと ちと ちと
 瑞のちと ちと ちと ちと
 行 ちと ちと ちと ちと
 古里のちと ちと ちと ちと
 志賀山のま ちと ちと ちと
 ちと ちと ちと ちと ちと
 ちと ちと ちと ちと ちと

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

窓に花婿ハ雪の海にさしぬ
とくろ夫二筋まふくしの先
軍ハ初追子藤をもとみ合
手あ何百きさくしの花
寺 寺 寺

同奉冬

阿のりもあまのふとくは梅汁
そくもさくもくは是の先もさく
居合ぬやゆらぬの玉やれさく
柳老名さくハ丸は 藤 原
赤い屋の法用とゆらハ代の色
ゆささこま一さくおすハ餅
信章 信德 青 章 徳

柗青

碧油の海にゆらぬ月まみ
更く志はく小使の 寺
み再やよとゆら一き萩の寺
新波の草ハ伊勢のゆら
屋一きさくゆら一きさく
かき小末や 柳一きさく
物徳よ理一きさく
干解四五枚られ一きの寺
寺のゆらぬ物一きの寺
み一きさくゆら一きの寺
藤野のゆらぬ物一きの寺
寺の積つて藤野の功徳
寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

晴つきの切まも秋や少くも
手一休り一尺をさる月の
花のよる朱鞘をこぬき夕
川やきつはれ岸の山を
二 せし川ももあつしよる
残竹さく新雪の海ゆく
風高く楊枝を半割りしん
夢印拵の紋のしつるま
双六の昔落れしし年待
宿舎の海をすく山とく
月のあつし高岡を公の之
かく戻れぬと測ハりし

書 体 書 体 書 体 書 体 書 体 書 体 書 体

小春園の大地のうらみ 鎌 取
秋の飯椀湯とありし中
一二秋法をさくしきこ
月ハむししの親仁友とら
菘 葉をぬれししきりし
胸 算用のすきみさく
三 秋 戻も半の秋に候風子
糸手ふたしつ波の舞中
河をたぐる石魂忽飛子
古の秋葉の葉系ふけり
晴るる人さしつる法
文正の子を是後さくなん

書 体 書 体 書 体 書 体 書 体 書 体 書 体 書 体

今りり新様をいそぐとよ
 物りりあしきりりものやましくとや
 何れはあはれ二階に追うるもの
 何れはあはれ猫の目の
 月影や夏の花琥珀の曇るふん
 隠えこころもいづつあはれ
 法のあるるあはれ。非言あはれ
 名跡のあはれ。一とくはあはれ
 上いひの越えあはれ。山とくはあはれ
 百景石はあはれ。梅のあはれ。あはれ
 雪とくはあはれ。梅のあはれ。あはれ
 守随極のあはれ。梅のあはれ。集

詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭

掛乞も小町の方へいそぐとよ
 らはあはれ。朽木の枝に宿るあはれ
 小物あはれ。麻呂のあはれ。あはれ
 入るあはれ。あはれ。あはれ
 海苔やあはれ。あはれ。あはれ
 さるあはれ。あはれ。あはれ
 磯帯あはれ。あはれ。あはれ
 らはあはれ。あはれ。あはれ
 飛のあはれ。あはれ。あはれ
 素のあはれ。あはれ。あはれ
 二粒あはれ。あはれ。あはれ
 三粒のあはれ。あはれ。あはれ

詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭 詩 亭

三
 傍きも人しつりてとて免し
 急鬼と名く安んずるま
 正之りて是れとてものか
 くに花喜らばもことごと
 ちハ地東殿山の大殿
 花のさうりに所中をよふ
 寺極の受中いししや
 有是なりわつ所際とて
 来りてよと吹くといひ
 先章の約子而の又とて
 恋の去りてはれはれそ
 伊勢中使の風の玉

寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

心中の山林竹木揃き
 末寺の宿屋菩提和の月
 三
 十才の和尚のうら秋あけ
 疎院ハうきり清やまか
 堂のいり理解の店の風
 くの心よのうら。候。着。の。あ。み
 恙の胸あすりわゆる人あ
 着けけの思ひ性こ
 うき中ハい進やうれと
 家ハの寺子宿汗う
 志あはす大花名の書お
 翻了借正床入の山

寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

邯鄲の里の新花月吟
よくくし 柳のふかふかと花
子白より 十万倍も鼻の先
糸おろし 丸のたむけ 昔 藤
音楽のふる 三味線あいの山
四折さ 八く 井のた 海
姉妹の 佛伽丘尼のけしき
ほろろと かくしの 佛のま 寺
ゆつぎ 黄蓮の膚のわらわ
小娘み くの 草 袋 阿
松林 油のき やき 姉 人
鯛の 飯のちき 焼く

寺 海 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

さのゆきを かくし 汁の 寺 情
まの 花 若 花の 寺 花
空や 花 白 糸 花 寺 花
花 ち 帰 寺 羽 第 寺 花

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

同年春

物の 花 花 柳 古 郷 花 寺 花
花 花 花 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花
花 花 花 花 花 花 花 花

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

園下の拂子家より子母家
 火付の巻とて行ぬくらん
 本三位統子と張るるくまき
 貞の巻や路おこしあふ
 かこく可子難波の梅は兄弟
 巻とくまの巻 朝吉の巻
 子能のくし陶の求多め字
 温能まきりつ後す橋のら水
 駒のす中の中は藤子引く
 急のやららと種くまら
 買うてまね如ほ巻を付る
 川の大ききつらゆ一坐

法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

物は系之三子根伊布きん五郎根の
 地獄やふりやき石破くや
 小堀ぬふ奴の枝はたまむき
 滅全ゆり氣掘り候羅王
 子玉根木子候くまら神
 岩戸のくしけく候羅の元世
 路の文字一分と寄る定し
 控のかとくく古巻の月
 秋や巻くし二代目の地巻かき
 ぶらひの巻奉 御 巻 巻
 巻の枝巻巻く巻く取く
 月く巻れ巻人巻 甘草

法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺 法 寺

真ふ子一おふふは、残燭と
口情の花は夢うかめく左印
ふ〜ま〜と野を眺〜山吹
ひ〜ん〜とふ〜と〜や〜
あ〜ん〜と〜に〜
お情子ゆ〜の〜の本〜と〜
根子〜あ〜つ〜お〜る〜
長敷のあ〜ま〜お〜人
茶ら〜の〜
幾月のお〜と〜
と〜と〜
残情のあ〜と〜

以〜子情を扱〜ふみよら
思名甜の族子〜
や〜引〜
な〜と〜
三〜
山〜
浮〜
多〜
お〜
官〜
志〜

親仁は説法のみはきくはる
系小紋の羽衣はまきよはる
はらきくはる縮の夕中ひき入
管絃を本情の舞やさきくはる
琴籠ハ所れとも毛糸を替くハ
緋の骨ひきくはる里の月
又まけくはる丸山の色
片菱燈籠の赤花ちきくはる
うすみのうすくはる縮くはる
三
まきくはる赤掛はきくはる
段川御守きくはる
はらきくはる縮くはる

はらきくはる縮くはる
まきくはる赤掛はきくはる
段川御守きくはる
はらきくはる縮くはる
うすみのうすくはる縮くはる
三
まきくはる赤掛はきくはる
段川御守きくはる
はらきくはる縮くはる

けんとおきまわしの海は
小舟の舟子 留の月と月
展平 沈む 舞臺の 家
亭 風と山 花と 花から 花
かゝるゝ 花と下 おと 花と
花ハあやうふ人 花と 花も
海士の 花と 花の 花と
あやう 舞臺 花と 花と
八重 豆 腐 花と 花と
面影 花と 花と 花と
あやう 花と 花と 花と

同季秋

のまはるゝ 花の 花に 花の 秋
花の 花と 花と 花と 月
花と 花の 花と 花と 花
花 舟の 花と 花と 花と
花の 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花
花と 花と 花と 花と 花

春燈

三十一

静かきうきうのこけりてのうら
お作しりしは流るる水は流るる
被ぬのこけりてのうら
小きききと大ききと
鬼こけりてのうら
天も花も
飯のこけりてのうら
あつきのこけりてのうら
おのちのこけりてのうら
令捨降るる
異所門は

おそはれ首のうら
蒼舌をハツ
去折文
草物右
古川の
先きき
日待
や
おの
肉熱
松ハ
花ハ

納ふよし 中へ了ふとく
浦もや松葉所けき悔むん
嵐 阿比ゆくと謝の又浪
於小舟米俵の泣きひき
花も 籠もあま子生 けり
と物とれはあしと女は負振神
大海とくは口とく ち
一舟の月合の切らさうきて
ばくらちうあうし 小男兼の角
教芝居ぬれと袖の雨のち
左のちを 右とく して生
麦飯の井や麦子 養あつん

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

妙ふしのくもさういふのうい
幽子ハ残海舟ううういひか
さの休月うういひき海子の浪
殺ううう金龍山や尺ううい
智天うういひきううい
帳印の志久を油あけうきて
あううううう石川ううい
まのあひをすううのたげうい
既うう帯も軍やううい
將の力様所うううう
ほあをうううううう
古男ううううううう

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

勢の床子走免らるる一
産物す浅みらるる一
ききしもの多お天のうく山
休ほねのよめうおふとむこく
古葉子とる仲人のう

浪 喜 喜 喜

同

桃青

宮や内百の金子の通つ町
ま子数あしぬ看板のう
新葉麦七三三回かたれ子
芦の葉らゆつ一し味るる浪
甚や棚子一舟ふふ之

二葉子 紀子 卜尺 二葉子

一男子と名与布そのの対
糸ものも光悦流ううれう
葉草喻ふとすう一
吉論の強地ぬ奴も盛る
あをたつ子一編青の山
隈とつ峰う内りるう
秋を中布北店り山風
枝多の勢あしうまられ
精を河け北三位入
かとおむるはるるう
又厚とる陸子う
号はたわる金子をぬう

桃青 卜尺 紀子 二葉子 二葉子 紀子 二葉子 二葉子 二葉子 二葉子

二 託田のたぐは抄書
 毛體を佛門の用うる錦
 三 破れ裳御衣のたぐは抄書
 四 押入や袋のたぐは抄書
 五 織子のたぐは物衣のたぐは抄書
 六 能く是れをたぐは物衣のたぐは抄書
 七 辰様うたぐは物衣のたぐは抄書
 八 尾智とす根のたぐは抄書
 九 姐板のたぐは物衣のたぐは抄書
 十 昔の秋三子御人のたぐは抄書

二 釋かものたぐは抄書
 三 叔母のたぐは抄書
 四 大坂のたぐは抄書
 五 神宮のたぐは抄書
 六 鬼一口のたぐは抄書
 七 花のたぐは抄書
 八 忠れをたぐは抄書

同七毛未冬
 三 荒體味唱のたぐは抄書
 四 信風のたぐは抄書

三十一
 三十二

三十一
 三十二

二 三子
 三 紀子
 四 卜尺
 五 二葉子
 六 紀子
 七 二葉子
 八 紀子
 九 卜尺
 十 二葉子
 十一 紀子
 十二 二葉子
 十三 紀子
 十四 二葉子
 十五 紀子
 十六 二葉子
 十七 紀子
 十八 二葉子
 十九 紀子
 二十 二葉子
 二十一 紀子
 二十二 二葉子
 二十三 紀子
 二十四 二葉子
 二十五 紀子
 二十六 二葉子
 二十七 紀子
 二十八 二葉子
 二十九 紀子
 三十 二葉子
 三十一 紀子
 三十二 二葉子

破多能衣おもくつけつ
嵐とくくは能くも力の入る
紙切けしきハ勢切し
何し強しや正女ハ枕の初尾を
百もたささうたさふれの秋
仇し女をかうこの程分の後さハ
あしひいてのち十太の能海
又男ハ必かうらハかきくわ
古の相好子志まし
つくくと記念のやまを相ま
終ひくと女ぬさへきうの能
強かへるれくやうらさりの有
書 書 書 書 書 書 書 書 書 書

やけりさるる原の 細そ
料理人少あをまきる花の浪
木を厚の扇けのまき 風
任吉のゆ干す尺しぬ小刀砥
海の娘松 強ものまきとく
まきだに強強と袖も強つ
枕あきくし強めけぬ果
論とつす天の厚きし甲強て
経のにおおき強きさし
滑川のゆき艾子火きし
朝宮さうし剛筆の風
いとまきさう利久といし
書 書 書 書 書 書 書 書 書 書

手入桐子の度袖内もあつて
くぬのこころし風のみくは
阿の針を餅よあつたる宮の志
猪子をもはひて崎のねさる
知りしけ岩根の床村と見風
あつた涙もあつたまのしつ流
子中さるふ袖より傳ふ風さる
何と軒子とまのしつけり
五十点あつた中もはひてさる
しつあつた心も流れてさる
随流りあつたしつ流の象
看羽あつたしつ流もねま

風 高 風 高 風 高 風 高 風 高 風 高 風 高 風 高

小形時雨思ふもあつた流り
くぬのこころし風のみくは
風自ふ小使童より流り
天吹折る流れ夕つゆ
石もあつた流り枝子流りん
乃く志や一書ふしつ流り月
高の象色の流り流り流り
流りもあつた流り流り流り
高き板竹破る流り流り流り
嵐の流り流り流り流り流り
宋儀子もあつた流り流り流り
流り流り流り流り流り流り

風 高 風 高 風 高 風 高 風 高 風 高 風 高 風 高

夜も静けし神の月
神の月も静けし神の月
花も静けし神の月
古郷の静けし神の月
岸の静けし神の月
義経の静けし神の月
王子の静けし神の月
吟も静けし神の月
赤も静けし神の月
朝も静けし神の月

初春の静けし神の月
乙女の静けし神の月
異船の静けし神の月
石山の静けし神の月
夕暮の静けし神の月
是の静けし神の月
古来の静けし神の月
よしの静けし神の月
雪の静けし神の月
さしの静けし神の月
朝の静けし神の月
一分の静けし神の月

おろくく新子むは花ハシ
るやらのくくく山里のま
冬

次韻 夫和元辛酉

表題

晋伯倫傳酒德頌樂天絶
酒功讚青追之續信德七百

五十韻

二百五十句

何ぞのをまろふ志の花あれと

三 又うさねのまもあらく

体中のけり餅子肝去る残るく

柳青

画句以テ莊子可レ見ツ矣
襟骨の力なしくそ来すに
志くくくんれねけり物
骨子来すいひきを解るけり
竹心くすもいひきん月
微高ゆく麻の山の木官より
葉より解さく黍のの守
後すぬ画眉をまろふまきん
思出さるる一まつたけり
本りく此乞食の軒のいをみす
先祖を尺くすおの取らる
妙をくくく幽果を考へん

其角 才磨 楊水 高 水 磨 角 水 角

三
 武士は又まつるをゆれさる
 女ハふく子とやふとさしむ
 さハ巧く後ハ心づく恨
 くらけ猫の月を背けり
 家子病と具易別易志
 乳新の穀の梅の昔の紫
 去秋を花く食よれは日
 白魚をかきく解春の家
 実子ハおほん似社合を
 徳士提灯も枕一は秋
 くらたあつる女房のあま
 青 水 角 水 角 高 水 青

血摺は病を和やあつるん
 くれましむらむ起るま
 因樹の心をものくハむ
 名
 天帝の目安をまらわし
 桂を塚つる星移るる
 市の旗子風のなまの山
 秋子對しる不常事の代
 白子親仁紅紫村子送
 池の火新鮎と組
 師魚の諫め鰻ハ胸を刺
 安房の岬と法人必も
 向はるは法寺は燃
 青 水 角 水 角 高 水 青

木の合とわくく箱受りてはハ
垣刈のちりて耳の縁に立
自の秋にみえりては且た
ちりて志のむ妹の夜更
子のしきく後子と虫の縁に
縁と函のしは無き位
小納りて木枕に布きりて
納戸の種も肩に系り
煤掃の禮用は鯨の脯
庭のわが箱置原うりて入
風いよ木とわくあつたに
煮瓦子とわが板床にたぐ

角 磨 水 青 角 水 青 角 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角

椀にや白骨の後聚けはは
ちりて刺刺話とよむは長し
得小僧豆敷子内の結を割む
曾を写るも是も子に風
花のちの御子半を直きりて
椀に子籍をつりてしるま
お布りては子ハと手の合を掃
箕をくえりて重く在りてん
石のしは此かろりの枝にせよ干セル
山を踏むを抱りて
思ひあふ人ハ地籠りしゆ
木椀のちりて木爪の唇

角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角

駒鹿子鬼灯の籠籠思し
踊 鶴衣此 裾子しり 浪
海の月佛伽坊主の夕榮子
古 桑子うー やる 美の 泉水
に骨死 掌の字九 糸も七 やつ
ほあしう子 ぬく 火と化
築地河の根の底の 車引しめ
天火の園の 金けり。号
三、 坂江の磯ホ岸ホハ 志く 浪子
青 海 苔子うーい 堀 野子 子
花の 蓮 江 花子 花 宿 を 賞し
白子 秋とふ 赤 金 の 宿

角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水

きひしう 浅 草 妻 子 前 青 豆 陸
夕う 深 草 子 久 負 住 けし け
松の木子 塔 塚 丁 子 ぶ ぶ 福 之
枕の 信 女 高 葉 子 ぬ く む
管の 糸 を 何 と 松 魚 子 高 久 魚 子
糸 一 可 依 子 ぬ く 子 ぬ く 子 ぬ ぬ
出つしを 跳 折 子 ぬ ぬ 念 骨 骨
泥 付 儲 子 高 の 火 高 子
字の ね 子 高 葉 子 高 子 高 子
秋の 里 丘 足 子 ぬ ぬ 踏
配 取 人 芦 の 小 忌 布 子 干 子 ぬ ぬ
何しぬ 花 蘭 子 高 葉 子 高 子

角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水 青 角 水

河くはともあそびハ菊子木船く
能きいすく生海流漸く
雪の雪みきれの雪くさくハ
蕨の雪子題を返る
赤やつこかられた風林と呼
折子雨おをもえきまてあはし
婿きや中府のせきくは付を
急ゆきれく牛子子計り
青文く柱の戸板をこら板す
枯ゆく扇子あそぶ心
蟹籠の位きむあハ蓮一
卒整装の男ゆり
角 青
水 角
水 角
水 角
水 角
水 角
水 角
水 角

骨刀かたくけつゆのまらきこ
瘦くくくくの氣子新くつ
肉子七角もくくハきのふ器取
米くく青け耳くあけき
きくもかびく美子あきく秋あき
雪強屋士くくお子くく月
雪耕す雪強の雪子あけけ
雪雪雪あれきりれ
雪雪の雪入車やくく
雪雪くく上お侍くく
雪雪くく提了板の雪強の雪
提打きくく雪の可けり
角 青
水 角
水 角
水 角
水 角
水 角
水 角
水 角

風あつ角均とあを怪りり
入の山あみ狼子一のり
雷の斧下こくさる文子
言く又云一龍段の玉
俗のしふ麻島の海に居る和
郭のりお赤地赤黒
何を受く蛤の物く官尺くら
ひるのくしとあ兼をもも
有る草々草の葉に折折
葉のりあてき子下つる
雲龍の羽のいの敷ひり
あは起り第一巻めあ

角 青 水 磨 青 角 水 磨 青 角 水 磨

登りあつ人八志のひるあつあ
穂もあつだくらの木
古家のほあつ周子さつあ終ハ
いしらのほあつ風のりあ休
麻の葉子生る小餅をああつ
あつ枝さつあつ生る油子
きつれくつ清く味あつあ
ゆき雨葉もとり後あつあ
屋宇の食くほつに又あつ
人死を待つるあつあつ
石曰あつあつあつあつ
木あつあつあつあつ

角 青 水 磨 青 角 水 磨 青 角 水 磨

五十二

五十二

新... 角
狐ハ碎... 入ル
去

同 餅無
揚水

附... 桃膏
名用... 其角
才丸

天和... 康城
子春

風... 卜尺
雨... 曉雲
宵... 甘角
せん... 芭蕉
方... 素筆
料... 似眉
孤... 非雲
蝶... 言水
あ... 執筆
粉... 樹
袖... 子
小... 尺

情さるる望の望をよきわたり
於杖の精を以てくたさる
の御坊卒おぼえを言の字林
ハ夢の肉を言を揮
味も精もよきおぼえの戸ハ
泣くおのくく羨の小女
羨をよき花訓の足入り
於杖の地をきくくたさる
功先の形をよきくたさる
飛鷹のよきく併りて飛
鷹の代ハ望の如く我の
好く物言くよおの

暁 暈 角 之 昨 似 子 樹 曉 角 暈

おぼえの望の望をよきわたり
於杖の精を以てくたさる
の御坊卒おぼえを言の字林
ハ夢の肉を言を揮
味も精もよきおぼえの戸ハ
泣くおのくく羨の小女
羨をよき花訓の足入り
於杖の地をきくくたさる
功先の形をよきくたさる
飛鷹のよきく併りて飛
鷹の代ハ望の如く我の
好く物言くよおの

暁 暈 角 之 昨 似 子 樹 曉 角 暈

陽をの具殿屋作りの大工
蟻の巣の百の葉
と那のくくは是若の袖を引
様りの坂は清く濁るれ
無くは甲と初りのけ屋
餅をぬぐりの大書小の係
長史ふく乞食ハ糸の紫竹
子布をもふく牛菜の葉
崩くく願ハ又多此媚をう
古佛の殿に候をく月
若くくこれ蒸山伏の袖めんと
伴白雲の后こう

らきく牡丹ハ雀の如く火子
白袋袖躍りや免舞 狂
赤紙免了乙解とく雨降れ
夕影長若且あつらん
丸の火焔子赤紙の葉を煉
序を去れり友の文檜

同
故竹垣積り木原の葉あうれ
笠あもくくおの葉あうれ
あはくく雪子梅を掛らん
市子小字をあふ新月

栗樹

一目
芭蕉

樹

雲情の残を結し一糸代より
月織り角とくく風志極
何し世の梅をわく字の月
破道強つて詩の上をこ次
新解子面瓜を踏つてる可也
つしきくめひの松浦片横
欠つた尺の楊屋くり萱麻
母ハ私にささくき後のむ
根ハ如氣ハ六十の荆うさぎ
詩何ぞ故すうく表を束し
人の悟り終長の夜の藤子ま
松江くしきやまのゆけおれ

晶 角 景 雲 晶 道 景 角 晶 雲

六十一日

きくやや情中を似ていつやうく
山野子知る餅を食ふ
空舟の月を仰ぎ足は小
木城ハ武士の情 叶
尺くしき物書も校や案紙
名心きんやと胸にけり
曉の霜を毛母を覺され
路子 雲心あすす
花子 柳屋 山の駒をえり
梅子 すねる 瀑布を酒飲

晶 角 景 雲 晶 道 景 角 晶 雲

同

六十一日

三
榮生^三も世に奴^二に^一きん
す^二我^一の^二学^一を^二其^一に^二お
す^二法^一の^二切^一の^二衣^一に^二并^一に^二た^一る
者^二を^一力^二む^一率^二初^一は^二大^一小
併^二の^一多^二門^一を^二又^一を^二よ^一る^二の^一や
凡^二丈^一三^二百^一人^二の^一事^二を^一言^二ふ^一

寛文十戌年

其^二と^一信^二も^一さ^二其^一之^二風^一を^二吹^一と^二名
交^二走^一り^二可^一信^二り^一ゆ^二り^一玉^二民
か^二け^一作^二り^一何^二事^一も^二し^一に^二足^一後^二に^一

助勝

同

校^二ハ^一家^二の^一玉^二を^一友^二方^一の^二一^一葉^二切
と^二其^一の^二衣^一の^二切^一り^二つ^一と^二其^一の^二衣^一の^二切^一り
冷^二し^一き^二石^一ハ^二さ^一き^二あ^一り^二と^一虎^二に^一似^二と^一

長忠

同七未年 一白附

肩^二の^一衣^二物^一を^二う^一ら^二の^一衣^二の^一衣^二に^一似^二と^一不
と^二其^一の^二衣^一の^二切^一り^二と^一其^二の^一衣^二の^一切^二り^一
好^二生^一の^二衣^一の^二切^一り^二と^一其^二の^一衣^二の^一切^二り^一
志^二の^一衣^二の^一切^二り^一と^二其^一の^二衣^一の^二切^一り^二と^一

宗房

宗房

鴉、二羽をたれおきさつ〜れ
おこきお〜う〜海をかえん
方

延享六年戊午

大坂屋の燈も〜に不二の嶽
故手さ〜れ舟田子の海子
祝書

虫の聲白髪と〜あう〜れ
瓜の中ごの空巻り〜

孔子、鯉魚のさ〜み〜れ
お起す〜巻去の頃〜力更〜

祝書、其居〜〜
蘇〜〜何れは直〜

物〜鬼の甜食の生肴
古〜海村の油末

珠梅、大急熱の苦〜交
仁義、昔〜梅も〜

猪欄、の〜〜山〜
大宮の海〜お〜

確めしつゝも集まや入ぬらん
大津幸良殿とある良の御時
或る少くも引つゝらひてよふと
敵千しうも足さる尾つぎ
桶ひし物のおもてとあうら
それ人 可きぬのひその出
るの世うらふ業は秋あつら
唇細あははすの海浪

おもしろくも尺の如くも装束
中へくつゝもあつらふらん
くあつら 既千の中あつらふ時
御あつらをきまゝの御念の心
妙のくつゝも業はあつらふ
此界もあつらふらん大御新
お坊千もあつらふらん海浪
紛績可入もあつらふらん

上ハ船さし中ハ竹 葉

心平かあふ長持のふた

息の筋をき海子流めし花
女院 流しうれ二位ハ尼 齋

大正の退屈くすお茶する
唯信 院のさつき 稲葉山

実心くみあつし人のさる
みのさし小櫃ゆき玉のさる

子響きくまりのあつと流すし
草のさるうつし 新カをさる

野子さるあつし人のさる
是も又さるさるく 優信のさるあつ

白菊さるさるしき 浮屠の年
菩提もく木 徳ひさるかさる

さうあられ松海とや五印系河
とや舟千のりた原く系橋

了和手中

伴賀佛集物

青府

栗吹志山寄余厨秋ころゆ花
自紀飾ころはくろの松
佛寺庵ころはくはくゆらむら

一品

桃青

天和四甲子

春のい

世道世ふそ句と子籠之よ
月とあまを海の気食

芭蕉

枯枝序終のころはくはくゆらむら
漱ころりゆくき方はき里

芭蕉

素巻



